第4回国際経穴部位標準化に関する非公式諮問会議報告

会期：2005年4月25日～27日
会場：韓国韓医学研究院（韓国大田市）

第二次日本経穴委員会作業部会委員
（形井秀一、篠原昭二、浦山久嗣、香取俊光、小林健二、河原保裕、坂口俊二）

Ⅰ．第4回会議について（形井、坂口）

はじめに

第4回国際経穴部位標準化に関する非公式諮問会議（以下、会議）が、表題の会期、会場で行われた。今回の会議は、2004年10月12日～14日の第3回会議（京都）、そして、2005年2月21日～25日の第1回タスクホース会議（北京）を踏まえて、来年の世界会議に向けて、日中韓で非公式に行う最終会議となる予定であった。

会議の基本議題は、①部位の非同意穴の検討、②同意穴の部位表現の検討、③本の出版の内容、④チャートや人形などの作成に関する検討、⑤次回世界会議の開催地の決定、⑥世界会議終了後の本諮問会議の継続に関する事柄、であった。

しかし、メインテーマである①と②では、経穴部位は最終合意に至らず、また、他の項目についても、次回の会議で再検討することになった。つまり、もっとも重要な問題である経穴の部位のすべてが決定するに至らないために、第5回目の会議を必要とすることになったのである。

さて、今回の大田会議には第二次日本経穴委員会作業部会の7名の委員全員が参加した。本報告は、作業部会の委員が分担してまとめたものである。

参加者

参加者はこれまでアドバイザー3名としていたが、北京のタスクホース会議の際に4名のアドバイザーにすることが決定され、今回の会議では各国から4名のアドバイザーが参加した。以下に、参加者をまとめる。

1．WHO西太平洋地域事務局（WPRO）

(1) 崔昇勲（チェ・スンフン）
　伝統医学諮問官

2．中華人民共和国

(1) 王雪苔（ワン・シェタイ）
　WFAS（世界鍼灸学会連合会）名誉会長

(2) 黄龍祥（ファン・ロンシャン）
　中国中医研究院教授

(3) 呉中朝（ウゥ・ゾンツァオ）
中国中医研究院教授
(4) 晋志高（プゥ・ズィガオ）
中国中医研究院教授
(5) 譚源生（タン・ユエンソン）
中国中医研究院

3．大韓民国

(1) 姜成吉（カン・ソンギル）
慶熙大学教授
(2) 金容奭（キム・ヨンソク）
慶熙大学教授
(3) 李恵貞（イ・ヘジョン）
慶熙大学東西医学大学院教授
(4) 具成泰（ク・ソンテ）
韓国韓医学研究院
(5) 朴希浚（パク・ヒジュン）
慶熙大学助教授
(6) 李相勲（イ・サンフン）
慶熙大学助教授
(7) 任允卿（イム・ユンギョン）
大田大学教授
(8) 宋昊燮（ソン・ホソォプ）
暻園大学助教授

4．日本

(1) 形井秀一
筑波技術短期大学教授
(2) 篠原昭二
明治鍼灸大学教授
(3) 浦山久嗣
経絡治療学会学術部員
(4) 小林健二
北里大学客員研究員
(5) 香取俊光
群馬県立盲学校教諭
(6) 河原保裕
日本鍼灸師会学術局経穴委員
(7) 坂口俊二
関西鍼灸大学助教授
(8) 斉藤宗則
明治鍼灸大学東洋医学基礎教室

今後の日程

①第5回会議が9月下旬に日本で開催されることになった（開催都市未定）。ここで中国語による3カ国最終合意の部位を決定する予定。
②また、第2回タスクホース会議が北京で8月中旬に行われることとなった（各国代表1名）。
③来年の世界会議の開催国は、第5回会議の際に決める。
④できれば、定期的な更新の会議を開催する。

第二次日本経穴委員会のこれまでの活動

①第二次日本経穴委員会発足：2004年4月25日
②運営委員会構成団体（5団体）：全日本鍼灸学会、日本鍼灸師会、東洋療法学校協会、日本理療科教員連盟、日本東洋医学会
③オブザーバー参加団体：日本伝統鍼灸学会、日本東洋医学系物理療法学会
④協賛企業：医歯薬出版、医道の日本社、セイリン株式会社、セネファ株式会社、伊吹モグサ、東洋鍼灸専門学校
⑤検討作業部会：合計11回（2004年5月～2005年4月）、延べ100時間以上。
⑥委員会への意見：3件……参考資料をいただいたもの2件、活動のあり方のアドバイス1件。

Ⅱ．会議の内容について（浦山）

第1日

ホテルから会場のKIOM（Korean Institute of Oriental Medicine：韓国韓医学研究院）まで、各国のメンバーのほとんどが3日間ともマイクロバスで移動した。

驚いたのは、会場に到着したときである。KBS（韓国国営放送）のテレビカメラが我々の

入場を待ち受けていたのである。韓国内での鍼灸への注目度がいかに高いかを実感させられた出来事だった。3日間の会場となる部屋へ案内されて、緊張感が増してきたのはテレビカメラのせいばかりではない。カメラは3日間の会議のほとんどを録画し、休憩時間に各国のメンバーの何人かにインタビューしていた。日本側では形井委員長と浦山がインタビューを受けた。

各国各4名のアドバイザーと通訳、そしてオブザーバーがテーブルに着いて、オープニングセレモニーが始まる。数名のホスト国側代表者の挨拶があり、主催者の崔昇勲WPRO伝統医学諮問官の挨拶で締めくくられる。崔氏は瘀血と腫瘍に精通する伝統病理学者で、『内経病理学』(1993) や『難経入門』(1998) など著書や論文を多数発表している。

休憩の後、議長に王雪苔氏（中国)、副議長に姜成吉氏（韓国)、レポーターに篠原昭二氏（日本）が指名され、会議は、各国の主張の異なる18穴の検討から始まった。昨年の京都会議で合意に至らず、各国に持ち帰って再検討となり、更に今年2月のワーキングでも議論を重ねたものばかりである。議論が最初から白熱してなかなか進まず、25日の午前中で終了する予定だったが、午後いっぱいを費やすこととなった。

挨拶する崔昇勲WPRO伝統医学諮問官

その結果、箕門・瘈脈・天衝・浮白・中封・蠡溝・中都・承光・通天・玉枕・脳空の11穴については合意が得られたものの、迎香・水溝・気衝・衝門・労宮・中衝・膝関の7穴が再度保留となった。しかし、保留した7穴についても議論を重ねた結果、確実に歩み寄りが見られた。

保留穴の各国の相違点を例に挙げれば、迎香は「鼻翼下縁」で日本・韓国が合意しているのに対し中国が「鼻翼外縁の中点」とし、水溝は日本・韓国が「人中の中央」、中国が「人中の上1/3と下2/3の交点」と表現した。

また、労宮と中衝は、京都会議の時点では、日本・韓国が「第3・4中手骨間」と「中指橈側爪甲根部」、中国が「第2・3中手骨間」と「中指尖端中央」であったが、その後、日本は経絡流注を考慮して検討を重ねた結果、「第2・3中手骨間」と「中指橈側爪甲根部」に変更して今会議に臨んだが、韓国も予想に反して「第3・4中手骨間」と「中指尖端中央」に変えてきた。労宮は2説とも古典に記載されているのに対し、中衝は2説とも明確に表現されるのは後代になってからであり、両者決め手を欠く。結局、当初の中国案に落ち着くことになりそうだが、今回は再検討ということになった。

第2日

26日は3カ国で位置は同意しているが、表記方法が異なる、天府・侠白・地倉・温溜・湧泉・頷厭・懸顱・目窓・正営・環跳・風市・中瀆・陰包・足五里・陰廉の15穴について検討した。その結果、環跳を除く14穴について合意することができた。環跳は、韓国・中国の「大転子の後ろ」に対し、日本も基本的には合意したものの、日本で伝統的に行われている「大転子の前」という別説を注記するように求めたが同意を得られず、保留となった。

また、急脈について韓国側は、先に3カ国で

同意していた「鼡径靭帯の上の動脈拍動部」では気衝・衝門と紛らわしいとして、「上」を「下」に変更するよう求めてきた。日本はこれに同意したが、中国は更に解剖学的資料と古典資料との検討が必要として同意せず、気衝と合わせて再検討することとなった。

第3日

最終日の午前中も、中国側から、表記について24穴の再検討の要請があったが、時間が足りず、そのうち肘髎・足三里・上巨虚・条口・下巨虚・解谿・衝陽・睛明の8穴しか検討できなかった。8穴のうち、肘髎・解谿・衝陽・睛明の4穴は合意が得られたが、足三里・上巨虚・条口・下巨虚の4穴は、表記については筋肉名を入れることで合意が得られたものの、中国・韓国間で取穴位置が微妙に異なることがかえって浮き彫りになり、再度検討することとなった。

午後は今後の検討課題として、英語表記の記述形式をどうするかについて韓国側から詳細なプレゼンテーションがあり、また、韓国・中国からそれぞれ、今後検討を要する図版および人形・ホログラムについてのアイデアが発表された。

また、中国側から今後の計画として、WFAS（世界鍼灸学会連合会）傘下に「針灸穴位定位国際学会」を創設したいという提案がなされたが、日本側から「将来的には選択肢の一つといえるが、今会議の性格上、WFASの委員会とすることは現時点では同意できない」という意見が出され、韓国も日本に同意し、継続審議となった。

最後に、公式会議の前に、もう一度非公式会議を行うことで3カ国が合意し、約半年後を目途に、これまでと同様の形式で、日本で開催されることが決定した。

長丁場の議論にそなえる日本側のメンバー

Ⅲ．会議の運営について（篠原）

はじめに

昨年10月に明治鍼灸大学で行った第3回会議では、会議の運営全般を担当した。不行き届きな面も多々あったが、各国代表者からは少なからぬ賛辞をいただいた。今回は、いちアドバイザーとしての参加であり、幾分気楽な思いで会議に参加した。

しかし、仁川（インチョン）国際空港から車で約3時間、サッカーワールドカップが行われたテジョンワールドカップスタジアム近くのスパシアホテルに到着したのは、夜の21時30分である。かろうじてホテルに隣接したレストランを見つけて空腹をしのぎ、23時30分から最後の打ち合わせ作業を開始した。すべての打ち合わせが終了したのが午前2時30分。会議前にクタクタ状態であった。ちなみに「スパシア」というのはスパ＋オアシスの合成語と聞いたが、期間中に誰一人としてホテル自慢のスパを堪能することはできなかった。

会場となったKIOM

会議当日、悪夢にうなされながらの非情な目覚ましの音に起こされ、朝食をいただき、8時

15分に迎えのバスに乗り込んだ。平日の月曜日の朝は、出勤の人でにぎわう大田（テジョン）市内をバスで抜けて、KIOMに到着した。昨年10月に完成したモダンな建物であり、年間7億5千万円の予算で、約60人のスタッフを有する国立の東洋医学研究所である。玄関を入ると韓国の伝統医学の歴史資料館があり、ハイテクを使ったモダンな展示が見られた。

2階には、脈診研究のための大掛かりな装置が設置され、圧センサーを使った科学的な脈診分析も行われていた。また、種々の生理学的な研究施設や設備も完備しており、さらに漢方薬の薬理学的、免疫学的、分子生物学的等の研究も行われていた。

会場は1階会議室で行われ、正面の垂れ幕およびスクリーン、きれいに並べられた机やファイルの配置は、相当入念な準備の賜物と思われた。ほとんどの準備は、若手女性研究者が担当したことに大いに驚かされた。

会議の途中、またコーヒーブレーク等では、飲み物やおやつ、フルーツにいたるまで提供され、細やかな配慮もうかがわれた。

ただ、ひとつ不足を言えば、京都大会では、3カ国の持参したコンピューターを液晶プロジェクターに接続して、適時切り替えて討論が円滑に行えるよう配慮した。しかし、韓国では、中国側の用意した資料のみをスクリーンに映すのみで、日本側の用意した資料等を映すことはできなかった。

また、中国および日本では、適宜議事録もスクリーンに映すよう配慮した。韓国でそれが行われるようになったのは3日目に入ってからのことであった。

会議の運営について

会議は、王雪苔先生と韓国側の姜成吉教授の司会のもとで行われた。今回の会議では、過去に行われた中国、京都に比して、検討慣れしているにもかかわらず、3カ国での合意を得ることが難しく、再度保留扱いとなる経穴が続出した。内容的に難しいのは事実であるが運営に関しても問題があると思われた。京都会議においてすでに合意が得られていた足三里にしても、表現方法だけが問題であったにもかかわらず、中国と韓国とではまったく折り合いが得られず、実際の取穴をデモンストレーションした結果はほとんど同じであったにもかかわらず、最終的には保留となった。いったん決定したものを覆してしまうのであれば、検討に費やした時間の無駄ともなりかねない。

また、環跳については中国・韓国では最初から坐骨神経刺鍼を狙った取穴法で定着しており、これに対して日本では股関節を屈してその横紋

議論は白熱し、写真上は迎香を、写真下は胃経の走行を実際に描いてみることに

の端に取るといった、取穴法にむしろ忠実な方法が踏襲されてきた。最初から目的、臨床応用が異なったものは、いくら議論しても合意のしようがない。これについては、両論併記するか、何らかの解決策を考慮しなければ、いたずらに時間を浪費する結果となりかねない。

さらに、気衝、急脈、衝門については、それぞれ前正中線の外方2寸、2寸5分、3寸5分または4寸であるが、いずれも動脈拍動部とされている。結局解剖学的な記述の問題および鼡径靭帯と動脈拍動部との関係が当然のこととして問題となった。しかし、これらもそれぞれの言い分を一つ一つ整理しながら解決していかなくては、決してまとまるものではないと思われる。

そんな意味において、施設・設備、準備等に関してはすばらしい歓迎を受けたけれども、肝心の会議の運営においては、種々の問題があると思われた。

第5回会議の開催に向けて

今回の韓国における会議では、当初期待した成果を得ることはできなかった。そのために、今年の9月頃に再度日本での会議の開催が決定した。もし実施するのであれば、①液晶プロジェクターは、各国の資料をすぐに切り替えて映し出せる設備が不可欠であること、②会議の議長が問題点を絶えず把握して、議論の的をはずさないようなリーダーシップを強力に取るべきこと、③議事録を液晶プロジェクターのサブ画面に表示して、何がどう検討され、最終的に何が決定したのかをタイムリーに確認できるようにする必要がある。もちろん、それを議長が確認しつつ次に進むという進行が望ましい。

過去に行われた会議を通して、この会議はほとんど無駄がなく、会議のためだけに召集され、ひたすら成果を挙げることが第一義とされてきた。したがって、その責任を参加者全員が負わなければ、統一見解を得ることは難しい。

日本での会議の運営が期待されるところである。

Ⅳ．大田大学屯山韓方病院見学印象記（河原）

大田大学屯山韓方病院を訪ねる

4月26日、会議2日目の昼休憩時に、私たちはバスに乗り込み、大田市市街地にある大田大学屯山韓方病院の見学に案内された。地上7階、地下2階の白くきれいな真新しい建物である。この建物の中ほどや屋上には緑いっぱいの庭園が造られ、患者さんたちの憩いの場となっている。

この病院は東洋医学を中心とした病院ではあるが、東西医学を融合させた新しいタイプの病院である。この日の病院見学には、院長の趙鍾寛（チョウ・ジョングァン）氏が自ら同行し、案内してくれた。1階の待合室のフロアには問診室が用意され、事前に患者さんから情報を聴取し、どの科へ受診すべきかを判断している。外来では婦人・小児外来も隣接して設置され、その近くには子供の授乳室、遊戯室等も設置されている。

また、この病院の特徴は癌病棟を持っていて、癌治療に力を注いでいることである。現代医学的な手術療法、化学療法、放射線療法を施すが、これらは多くの副作用を呈し、患者さんは不快感や痛みを伴うことが多い。また現代医学的な治療だけでは転移と再発を十分に防ぐことができないことから、代替医療として東洋医学を用いている。東洋医学の中でも漢方薬を中心に、副作用の軽減、免疫力の増強を図り、癌患者のADLの向上、転移・再発の予防に成果を挙げていて、漢方療法の臨床研究が進められている。

漢方療法以外でも患者中心の代替医療の考え方は生かされており、鍼治療室、灸治療室、マッサージ治療室、物療治療室、カイロプラクティック治療室、リハビリテーション室、トレーニング室、瞑想室等々、多種多様な治療室が存在し、これらを単独で治療するのではなく、患者さんに合わせて多様な組み合わせで行っている。

施設は驚きの連続

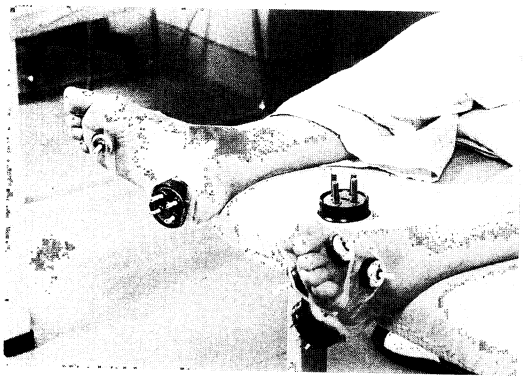
鍼治療室を見学したときに見た鍼は、日本とほぼ同じ形状で滅菌消毒され、10本ぐらいの鍼と鍼管が1セットになり1袋に収まっていた。また、灸治療室を見学したときには、たまたま患者さんの治療中で実際の治療風景を見ることができた。お灸は間接灸で、竹灸（竹の筒の中に艾を詰めたもの）や、煉った艾（直径5㎜、長さ3㎝）を筒の上に何本か立て、患者さんの皮膚に固定し、患部を温めていた。

特に興味を引いたのは、瞑想室である。患者さんはこの部屋で瞑想し、心の内側から心身を整えるようである。見学時には修道女の装いをした方がいらしたが、いろいろな宗教の専門家が日替わりで来て、瞑想のお手伝いをしているのである。日本でも終末医療のあり方がいろいろと論議されているが、韓国では実際に病院の中で宗派を問わず、このような場所を設けていることに驚きを感じた。ちなみに、カトリックとプロテスタントと仏教が行われるということであった。

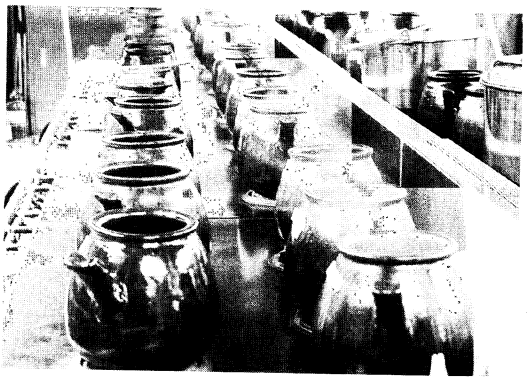
もう1つ驚きの画期的なシステムが病院の中にはあった。それは外来で処方される漢方薬である。患者さんは外来で漢方薬を処方されても薬を受け取らずに帰宅する。漢方薬は後から宅配便で配送されるのである。ここまでは日本でも行われていることだが、なんと韓国では配送される漢方薬は煎じてあり、服用1回分ごとに真空パックされているのだ。つまり、患者さんは自宅でそれを温め服用するため、自宅で煎じる必要がない。煎じる手間と漢方薬のにおいから開放されているのである。

患者さん一人ひとりに煎じて配送することは大変であるが、それを見事に実現しているのが病院内にある煎じ室である。漢方薬は機械によりオートマチックに煎じられ、真空パックされて、段ボール箱で患者さんに送られる。また、入院患者さん用に、コンロの上にいくつもの鍋（壺？）が並べられ、漢方薬を一斉に煎じ、各病室に送られるようにもなっていた。

また凄いのは高級病室である。一泊3万円で、電動ベッド、大型液晶テレビ、ビデオ、パソコ



大田大学韓方病院で行われている灸治療



入院患者の漢方薬をいっせいに壺で煎じる

ン、簡単なキッチン、豪華なバスルーム、庭付きの部屋である。要人の方々が利用することもあるので、至れり尽くせりの設備であった。

最後であるが、この日の昼食は院内の職員食堂でとった。病院職員に混じっての昼食である。院内食堂でも、やはり「キムチ」であった。食堂はビュッフェ式になっていて、種類は1種類のみ。しかし、量は自由である。趙院長と一緒に食事することができたが、「日本人は少食だ。だから世界一の長寿国なのか？」と言っていた。ただ我々は遠慮していたのと、食べ物が何なのかがわからないので、残さないように少なめに取っただけである。キムチの辛さを考えると、ご飯の量はもっと多くてもよかったと今では思っている。

V．大田大学韓医科大学と東洋医学の専門書店（小林）

2つに分かれたメンバー

今回の会議に参加したメンバー8人は、3日間の缶詰状態が終わった翌日の4月28日、2グループに分かれ行動することになった。お昼の帰国グループ（篠原、坂口、斉藤）はホテルを9時過ぎに出て一路、仁川国際空港へ向かうことになる。観光もままならず帰国するのである。残念。

夕方帰国のグループ（形井、小林、香取、河原、浦山）は多少時間があったため、大田大学と専門書店を見学することに5人の意見が一致したため、韓国側アドバイザーとして同席した大田大学鍼灸科教授・任允卿女史の車と助手のもう一台の車、計2台の車に分乗し同大学の見学に行くことになった。

大田市とは

大田市は韓国の中央に位置している。陸上交通の要地として各種の高速道路や鉄道の乗り換えをする拠点であるだけでなく、1993年に大田世界貿易博覧会が開かれた場所とあって、今日の韓国の科学技術の最先端をいく場所でもある。街には温泉もある。ちなみにホテルには温泉があったが、誰も入らずじまいであった。街を離れると寺院、湖もある環境のいいところである。

ホテルから会議の会場まではバスで行くのであるが、道路も広く、よく整備されている。また走っている現代（ヒュンダイ）自動車もなかなかのものであった。ちなみにアジアではトヨタに次ぐ、第2のシェアを誇る自動車会社である。

初日韓国に着いて、仁川国際空港から大田市のホテルまでの道のり、約200㎞を我々は慶熙大学の金容奭教授の車で送ってもらったため高速道路を約3時間以上要したが、もし韓国の新幹線（KTX）が仁川まで延びれば1時間程度の場所である。

専門書店の充実ぶり

大学の案内の前に、大学から少し離れた場所にある東洋医学関係の専門書店に案内された。間口も広くない書店であったが、棚にある本を我々は食い入るように見て回った。まるで飢えたハイエナのような、砂漠でオアシスに巡り会った旅人のような気分であった。

『大塚敬節著作集』、『素問霊枢臨床索引』、本間祥白著『難経の研究』、湯本求真著『皇漢医学』等々、日本の本が韓国語訳されているのには驚きであった。中国、台湾の本も多数置かれている。

当たり前といえばそれまでであるが、韓国の代表的著作『東医宝鑑』（許浚）、『医学入門』（李梴）などが一番目に付く場所に置かれていた。中でも特筆すべきは最新の鍼灸書の数々である。筆者はちなみに12冊買ってきたのである

大田大学の韓医学関係の研究施設

が、そのタイトルの一部を紹介しよう。『月悟舎岩五行鍼法』、『舎巖鍼法』、『金氏一鍼療法』、『経穴集成』、『臨床経絡腧穴学』、『穴 図解臨床取穴』。みなハードカバーで、取穴法・刺鍼法もカラー写真入りできれいに見やすくできている。ハングルで書かれてはいるが、写真・図・絵は世界共通であるから問題はない。目下、韓国語を勉強中である。

鍼とお灸の道具

この書店には、鍼とお灸の道具がガラスケースに置かれてあった。これまた我々の注目すべきところである。鍼、鍼管、温灸器、スプリング式の刺絡鍼、万年筆型の鍼などが陳列されていたが、やはり国が違えば同じ鍼灸の道具でも、どこか違ったところがある。日本の艾のような繊細な艾はやはりなかった。経穴位置の違いと同じで、文化・民族の違いが道具に表れている。直接灸はしていないのであろうか？　聞き漏らしたところである。半米粒大の艾を4壮、糸状灸を1壮などという直接灸は日本のお家芸でしかないのか。

大田大学韓医科大学

書店を後にして、第2の目的の大田大学韓医科大学を見学したが、時間がなく、1時間程度の訪問であった。書店に時間をとりすぎてしまった。

この韓医科大学の設立は1981年、現在1084人の学生が学んでいる。日本の医学部と同じ6年制である。卒業後は個人開業、病院勤務、研究施設での研究などの進路とのこと。

大学の中で廊下の一角を使い、書店が本を売っている。学生は基本的にここで資料をそろえるが、足りない分はインターネットで仕入れるのが今の学生の本の買い方と説明を受けた。

この大学では生薬の臨床試験など、さまざまな漢方薬の研究を進めている。経済的効果を見据えてのことか、いずれにしても漢方をアカデミックな形で研究する姿にうらやましさを感じる。鍼に関する臨床研究はどうであるのか。これも時間の関係と言葉の壁で今ひとつ突っ込みができなかった。次回、再会のときに聞いてみるつもりである。

参考までに、詳しい情報は以下のアドレスを参照のこと。

大田大学
http://www.dju.ac.kr
大田大学韓医科大学
http://home.dju.ac.kr/medicine/
大田大学韓医科大学鍼灸経穴学校室
http://acu.dju.ac.kr/~meridian

Ⅵ．韓国韓医学研究院（香取）

東洋医学に関する研究所

4月24日、我々、成田組（形井、小林、河原、香取）は夜の22時過ぎに仁川国際空港に到着。入国当初は小雨であったが、滞在中は天気に恵まれた。空港では韓国の金容奭先生の出迎えを受け、大田市まで約200㎞の道のりを送っていただいた。右側車線、ソウルのビル群、高層マンション、まっすぐな高速道路と行楽帰りの渋滞……。想像以上の韓国の発展に驚嘆しながら、

25日の深夜1時頃に大田市のホテル「スパシア」に着く。このホテルは、ワールドカップのスタジアム近くで、我々が泊まった11階は韓国代表チームが宿泊し、坂口委員は安貞桓（アン・ジョンファン）が宿泊した部屋だった。

会議場となったKIOM（韓国韓医学研究院）は、このホテルから車で40分ほどにあった。

KIOMは韓国の東洋医学に関する研究所の1つで、1994年の創立。1階には陳列室があり、パネルや古代の鍼・鍼灸の文献展示、韓国の名医・許浚のビデオ上映装置などがあった。2階以上は研究施設があり、鍼灸・漢方を科学的に分析していた。

古代の鍼の材質は、石（＝砭石（へんせき））のみと思っていたが、骨や木の鍼もあり、自分の不明を恥じた。許浚は、ご存じの通り『東医宝鑑』（1613年頃）を著し、現在の韓国に多大な影響を及ぼしている。小説『許浚』がベストセラーになったり、大河ドラマとなって、原作本は日本語訳にもなっている。筆者も日本語字幕のドラマを探し、教材にしようかと考えている。

展示物の1つに喜多村直寛（きたむらただひろ）（1804～1876）が復刻した『医方類聚』の線装本があり、CD-ROMにもなっていた。「このCD-ROMはほしいなぁ。『医方類聚』は引用文が正確なので定評があるんだけど、日本では入手できないんで未検討のものなんですよ」としきりにつぶやく浦山委員の姿があった。

管鍼を持つ刺鍼状況のパネルがあったが、日本の刺鍼法と違う印象を受け、次回には技術交流ができれば更なる国際交流ができると思った。

中庭は、日本代表の気分転換、喫煙、会議の感想や情報交換の場となっていた。キムチは漬け物の意味で、16世紀に日本から唐辛子がもたらされ、今のキムチとなった話を聞いた。日本の典籍収集や管鍼法の採用を含め、すべての文化が中国→朝鮮→日本というだけではない「文化交流」を改めて認識できた。

文化の違いを体感する

国家政策として東洋医学の教育・研究・普及、科学化、新たな可能性の実践、大学・病院・研究所などの施設・運営など、いろいろな角度から見学することができ、コリアンパワーに圧倒されっぱなしであった。韓医師は、日本の医師が鍼灸も行うと思えば理解しやすい。韓国はエリートが鍼灸を行っているのだ。当然、英語も流暢で、空港の英語アナウンスが一番下手に感じた。

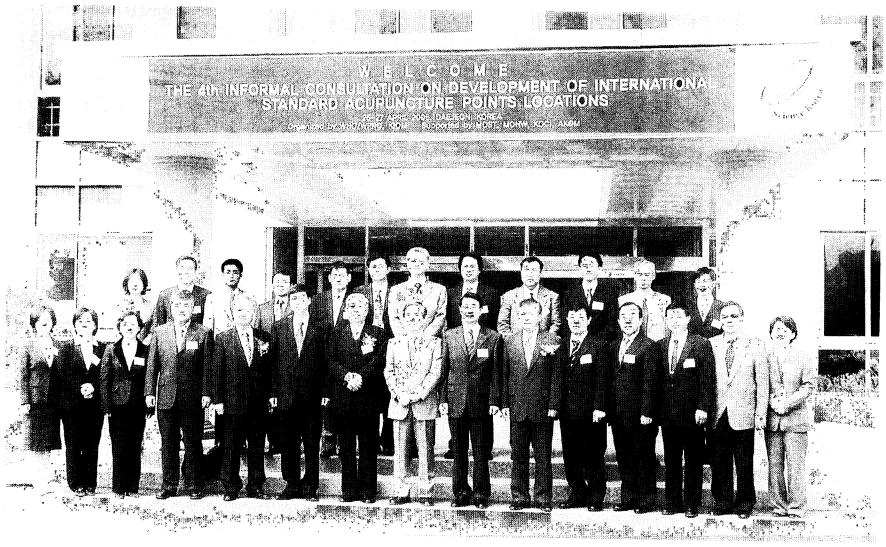
伝統鍼灸といってもツボに注射針を使い、漢方薬やアロマ液、蜂の毒を注入する例もある。出会った韓医師は、摩擦や圧迫を中心とした鍉鍼・円鍼・鑱鍼などの微妙な刺激法使用は行っていなかったが、日本の経絡治療に似た「五行鍼」という治療法があり、本も出版されていた。筆者は教員として、臨床研修と手技では負けない日本鍼灸師の養成の使命感を強くした。

また、筆者の研究課題である杉山和一のことを聞いてみたが、話した韓医師は聞いたことがある程度で、韓国における視覚障害教育の発展や日本の鍼灸の宣伝のためにももっとアピールをしていこうと思った。

最後に文化の違いや国民性の違い、国際化の難しさを感じたエピソードをいくつか紹介してみたい。

睛明の論議の中で、中国が「内上方1分」と表現したのに対し、韓国から「それは内側に1分、その上1分の意味か」との質問があった。

また、日本が「上1/3」という表現を使おうとすると、中国側からはその表現では誤解を招くとして「上から1/3と下から2/3の交点」との注釈がすぐに入る。



今回の会議に参加した各国代表

Ⅶ. まとめ（形井）

９月下旬に日本で第５回目の会議を開催予定

2003年10月のマニラ（WPRO事務局所在地）での第１回会議では、第４回の韓国会議で日中韓の３カ国協議は終了するプランが立てられた。しかし、韓国会議で最終合意に至らなかった。

経穴部位の標準化は、10年以上の歳月をかけた論議を経て経穴名が世界標準化された際（1989年）に、難航した挙げ句に決定できなかった難題である。そんなにすんなりいくはずはないことは、日本の作業部会の委員で討論をする過程で見えてきたことであり、それが２回目の京都会議で明らかになって、韓国会議の前にタスクホースによる検討も行った。しかし、結局、韓国会議でもすべての経穴部位の同意に至らなかった。

第４回会議で決着を見なかったのは予想されたことであった。異なる組織、まして、組織のもっとも大きな単位の１つである国の間で取り決めを行うことはそんなにたやすいことではないことは最初から覚悟していたことである。マニラプランになかった第５回目の会議を日本側から提案したのも、経穴部位標準化の意味の大きさからすると当然のことであった。100年後の人たちの検討の際の批判に十分耐え、検討の際の材料を客観的に提供し、改善すべき点が明確になりやすいように、現時点で行える最大限の努力をするべきであるというのが日本側作業部会の意見である。

８月の第２回タスクホースの会議、９月末の日本での会議を充実したものにし、納得のいく結論に３カ国が至ることを望む。ただ、各穴の問題点はほぼ出尽くし、各国で妥協できない点と妥協できる点も見えてきている。後は、どのような形でまとめるのか、３カ国の代表の力量が真に問われる地点まで来たと言えよう。